

今週の為替相場見通し(2023年6月26日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		141.22 ~ 143.87	143.71	140.50 ~ 146.00
ユーロ	(ドル)		1.0845 ~ 1.1012	1.0897	1.0700 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		154.07 ~ 156.93	156.59	154.00 ~ 160.00
英ポンド	(ドル)		1.2685 ~ 1.2845	1.2716	1.2400 ~ 1.3000
(1英ポンド=)	(円)	*	179.93 ~ 182.95	182.73	179.00 ~ 184.00
豪ドル	(ドル)		0.6663 ~ 0.6885	0.6680	0.6600 ~ 0.7000
(1豪ドル=)	(円)	*	95.26 ~ 97.68	95.99	95.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1)今週の予想レンジ: 140.50 ~ 146.00 円

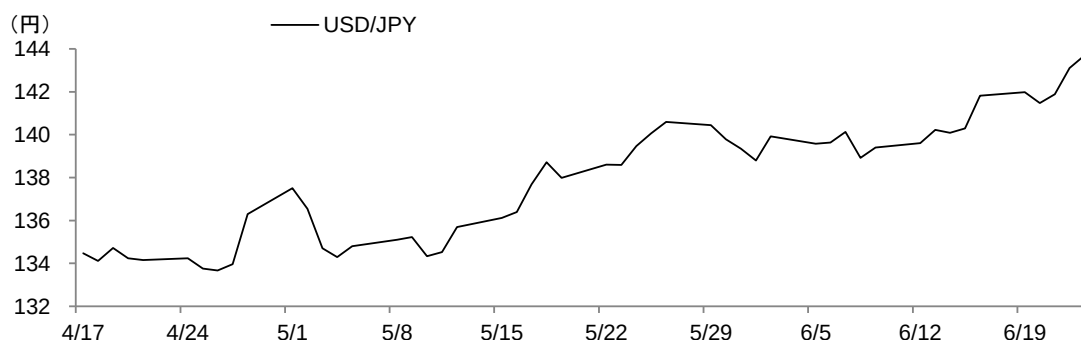
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は年初来高値を連日更新した。ドル/円は週初141.86円でオープン。仲値にかけて上昇も142円トライに失敗すると利益確定のドル売りが先行。141円台前半まで下落するも金融政策格差をテーマとした円売りは根強く押し目は浅く、再度142円ちょうどまで上昇し、高値更新。20日には5・10日に伴い仲値にかけてドル買いに傾き、142.26円を示現、高値再更新。ただ、中国の利下げが小幅なものにとどまったことから、株式軟調、欧州金利が低下。北米時間では三連休明けの米株も続落となったことからリスクオフの色が強くなり、為替市場では円高・ドル高の地合い。クロス円が軒並み下落する中でドル/円も141.22円の週安値まで下押す。21日には「緩和修正は時期尚早」という安達日銀審議委員や、「粘り強く金融緩和」という植田日銀総裁の発言が意識され、日本株上昇と共にドル/円も上昇。海外時間では142.37円の高値を示現。ただ、パウエルFRB議長の下院証言後の質疑応答で「利上げをよりゆるやかにするのが理にかなっている」との発言が想定よりもタカ派ではないと受け取られ、ドル売りとなり、141円台へ下落。22日は欧州時間でユーロ/円が156円台へと上昇する中で、ドル/円も142円台へと再度回復。ボウマンFRB理事の「インフレ抑制のために追加利上げが必要」との発言や米金利上昇を受け143.23円へと高値を更新。23日は日本株安や欧州時間での米金利急落でドル/円も一旦下押したが、北米時間では日本と欧米との金融政策格差が意識され結局143.87円まで駆け上がり、143.71円で越週となった。

今週のドル/円は高値圏での推移を予想。今週の中央銀行・政府系イベントの予定としては、26日(月)に6月日銀の「主な意見」が公表される。あわせて28日(水)のECBフォーラムで米・欧・日・英の中銀総裁の講演が予定されている。29日(日)にはアトランタ地区連銀総裁の講演、日韓財務相会談が控える。経済指標の予定では、27日(火)に米5月耐久財受注、米6月コンファレンスボード消費者信頼感、29日(木)に米1~3月期GDP確報、30日(金)に米5月PCEコアデフレーターなどが注目される。先週のドル/円は上下ありながらも連日の高値更新、結局日銀と各国中央銀行の政策格差にコントラストがあたる展開となっており、勢いづいてしまったモメンタムについては侮れない。クロス円の上昇に焦点が当たっていることや、FRBの年内利上げについての市場予想は1回のみ変わらないにも関わらず、143円をつけているということはドル買い相場というよりは、やはり円売り相場というのがここまでの為替市場だろう。当然ながら本邦から円安けん制発言も想定されるが、下がる局面は買い場となる。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/19~6/23)の値動き: 安値 141.22 円 高値 143.87 円 終値 143.71 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.1100 154.00 ~ 160.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、米金利低下を受け一時1.10を突破もその後は下落に転じた。週初19日、1.09台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、米国休日で材料難の中、ドル買い地合いとなる中で1.09台前半にじり安推移。20日、独5月生産者物価指数の弱い結果を受け、独金利低下に合わせユーロ/ドルは一時1.0891に続落した。21日、ナゲル独連銀総裁が域内の労働賃金上昇によるインフレ長期化の可能性を示唆したことで、夏場における金融引き締め継続の観測が強まると米独金利差は縮小、ユーロ/ドルは1.10を目指し上昇する展開となった。22日、ユーロ/ドルは独金利上昇を受け一時1か月半ぶりの高値となる1.1012に続伸も、その後はドル買いが強まる中、1.09台半ばに反落した。23日のユーロ/ドルは、序盤は1.09台半ばでの推移となったが、独6月PMI速報値、ユーロ圏6月PMI速報値ともに予想を下回ったことを受け、ユーロ圏の経済が一段と減速しているとの思惑から、売り優勢となり1.0845まで下落、終盤にかけて小幅に反発し1.08台後半で越週している。ユーロ/円は、ドル/円が年初来高値を更新する動きをサポートに堅調な推移。22日、ドル/円、ユーロ/ドルがそれぞれ上伸する局面において、2008年9月以来の水準である156.93まで上値を伸ばした。23日に独6月PMI速報値、ユーロ圏6月PMI速報値ともに予想を下回ったことを受け緩む場面も見られたが、一巡後は156円台後半に値を戻している。

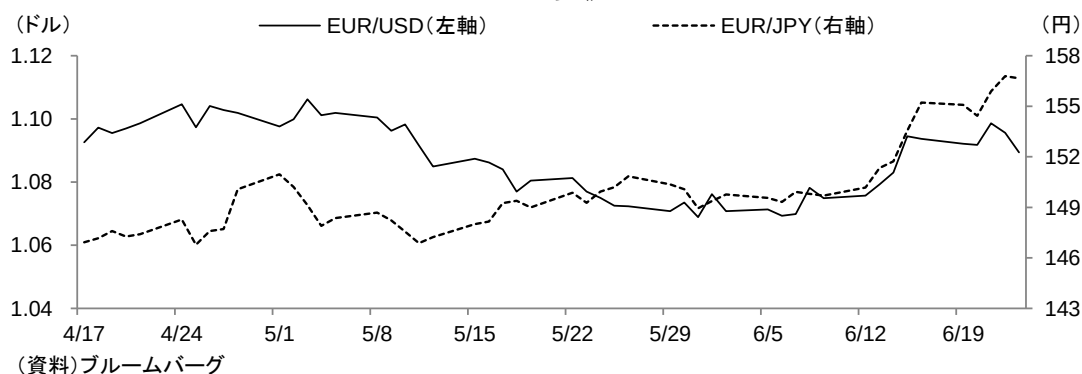
今週のユーロ/ドルは小確りとした展開を予想する。先般の6月ECB 金融政策理事会において、コアHICPの見通しに関し23年、24年がそれぞれ+0.5%上方修正されている。また、ラガルドECB総裁は7月の利上げ継続と9月以降のデータ次第のアプローチに従うと発言している。先週は1.10を付けた後調整地合いが優勢ではあったが、主要中銀でECBの利上げ余地は大きいとされる中で、ユーロが他通貨に対して強含む時間帯が多くなるのではないかと考えている。また、今週は30日にユーロ圏6月消費者物価指数(HICP、速報)の発表が予定されている。前述の市場環境下、インフレ鈍化の結果が確認されると、ネガティブインパクトを伴ってユーロ/ドルが大幅に下落する展開も想定されるため、同指標発表時には警戒が必要だ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/19~6/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0845 高値 1.1012 終値 1.0897

(対円) 安値 154.07 高値 156.93 終値 156.59



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.3000 179.00 ~ 184.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は対ドルで上値を抑えられる形となり先週末との対比では約0.8%下落した。一方、対円では続伸し先週末時点の182円0銭から182円80銭へと一段と値を切り上げた。米国ではパウエルFRB議長の半期に一度の議会証言が21日に下院で、22日に上院で行われた。内容は6月13日～14日のFOMC後に出された議長声明と変わりがなかったものの、改めて年内1回か2回の追加利上げが必要になる可能性が強調されたこともあり、グローバルなドルの反発につながった格好だ。英国ではもちろん、22日のイングランド銀行(BOE)の金融政策が最大のトピックスである。BOEは大方の予想に反して政策金利の引き上げ幅を従来の+25bpから+50bpに引き上げた。さらに追加利上げの可能性も示している。金融政策委員会(MPC)は7対2で利上げ幅拡大を決定した(なお、反対した2名は(従来通りの+25bpの引き上げではなく)据え置きを主張している)。ベイリーBOE総裁は「経済は予想より堅調だが、インフレは依然あまりに高く、これを何とかする必要がある」としている。また、住宅ローンやその他のローンを抱えた人が不安になるのは理解できるとしながらも、「金利を今引き上げなければ、将来的にさらに悪い結果になり得る」と論じている。BOEのタカ派サプライズを受けて、市場の利上げ織り込みは一段と高まっており、市場が織り込むターミナルレート(政策金利の到達点)はその前の週の5.80%から先週末には6.15%に達している。対照的に、中長期ゾーン金利は低下している。中長期ゾーン金利低下は、大幅な政策金利引き上げに伴う先行きの景気悪化を見込む動きとも解釈できる。結果的に英ポンドは、+50bpの利上げ発表直後こそ上昇で反応したものの、その後は上値を抑えられる形となった。

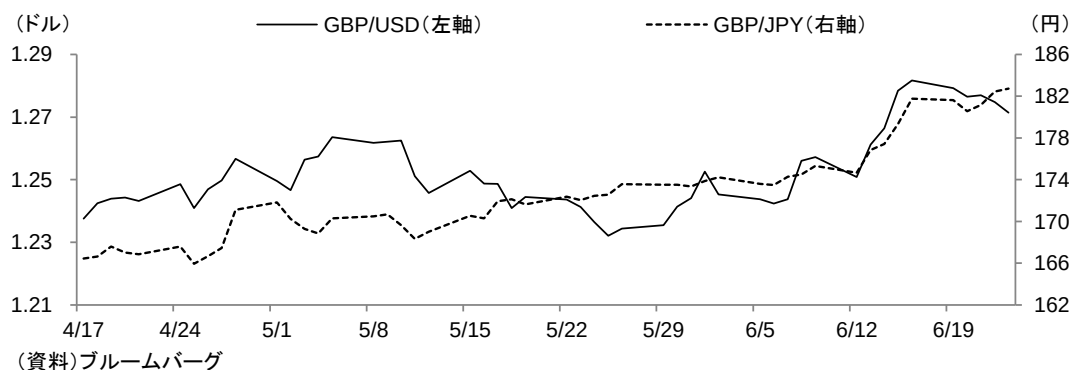
今週1週間の英ポンド相場は引き続き、高値圏でもみあう展開を予想。「BOE(及びECB)の利上げ継続・FRBの利上げ停止」という構図は変わらないと見られるものの、FRBの追加利上げの可能性も完全には排除できず、当面は米経済指標に敏感に反応せざるを得ない状況が続くだろう。特に30日に発表される米5月個人消費支出(PCE)価格指数は重要だ。28日(水)のシントラ会議ではパウエルFRB議長、ラガルドECB総裁、植田日銀総裁、ベイリーBOE総裁が揃い踏みとなり、改めてインフレ抑制に向けた強い姿勢が各国中銀から示される公算が大きい。とはいえ、先週22日の会合で示されたBOEのタカ派姿勢は鮮明であり、引き締め期待が英ポンドを支える状況には変わらないだろう。たしかに、BOEの大幅利上げ後の英ポンドの上昇は続かなかったものの、ベイリーBOE総裁が住宅ローン保有者の痛みを意識しながらもインフレとの闘いを優先させる姿勢を示したことは重要だと見られる。また、目下、米国市場でも2年国債と10年国債の逆イールドが2023年3月の米地銀破綻時の水準まで深まっており、景気後退懸念が再び叫ばれているものの、それでも足許の経済指標は米国でも英国でも引き続き底堅い。経済指標の動向を注視しなければならないことに変わりはないものの、景気後退懸念が市場のメインテーマになるという観測はこれまで何度も否定されており、為替市場ではまだ、当面、金利差主導の展開が続くと見ている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/19～6/23)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2685 高値 1.2845 終値 1.2716

(対円) 安値 179.93 高値 182.95 終値 182.73



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 0.6600 ~ 0.7000 95.50 ~ 98.00 円

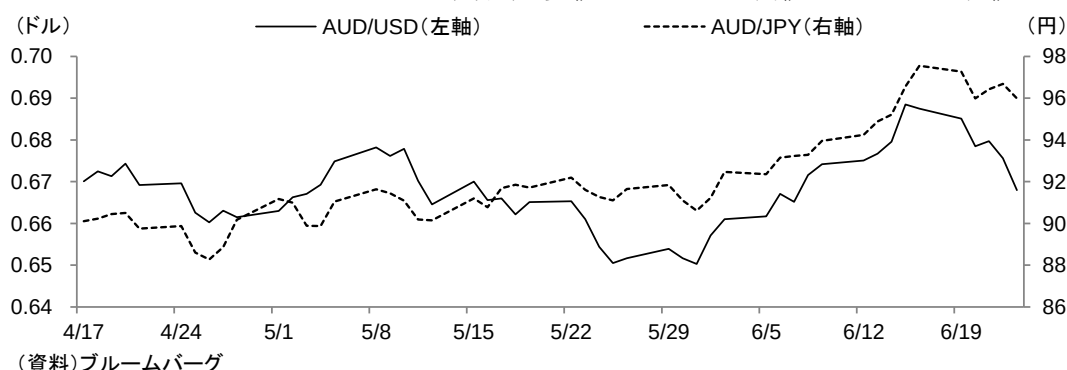
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル/円は、0.68台後半から0.66台半ばまで下落。週初19日、豪ドルは0.6872でスタート後、中国株や人民元が弱含んで推移すると、先週のドル売りの巻き戻しフローも相まって0.6835まで下落。海外時間ではNYが祝日休場で薄商いの中、値動きは限定的となり0.68台半ばで推移した。20日、豪ドルは0.6850でスタート後、豪6月RBA議事録要旨で、金融政策決定会合で据え置きも検討し、利上げと利上げ停止の論議が微妙なバランスであったことが明らかになり、ハト派の議事要旨に豪国債利回りが下落し、豪ドル売りが強まった。またブロックRBA副総裁は別の講演で「失業率が4.5%程度まで上昇するまでインフレ率が中銀の目標レンジに戻らない」との見方を示した。NY時間では、米株が弱含んで推移するとリスクオフの流れから更なる豪ドルへの重しとなり一時0.6754まで下落した。21日、豪ドルは前日のRBAのハト派な議事録要旨発表後、下げ過ぎた分を埋める形で0.6804まで値を戻した。22日、豪ドルは0.68台割れでスタート後、人民元が下げ止まりを見せると0.68台へ僅かにのせたものの午後にかけては特段の材料がない中、0.67台後半で振幅。ロンドン時間では英中銀が+50bp利上げし、政策金利を5%とした。ベイリー英中銀総裁は圧力が持続すれば一段の引き締めが必要となると語り、引き締めペース加速を示唆。短期市場では来年2月までに政策金利が6.25%でピークに達する事を織り込んだ。NY時間ではパウエルFRB議長が年内1~2回の追加利上げの可能性を示唆し、利上げサイクル終了が近いとの見方が後退し、世界的なインフレ警戒から豪州を含め複数の主要国の国債利回りが上昇した。NY引けは0.67台半ば。23日、アジア時間から株式市場の軟調な動きに0.67付近まで下落、欧米時間に入っても軟調な動きが継続し、0.66台まで下落した。

今週は、28日(水)豪5月消費者物価指数(CPI)、29日(木)豪5月小売売上高などが公表予定。先週公表のRBA議事要旨では、6月の利上げが、利上げと据え置きの「微妙なバランス」の議論を経て決定されたとされ、これを市場ではハト派的と受け止められ、利上げ期待は後退した。しかしインフレへの警戒は弱めておらず、実際前回の豪4月CPIについては、XJ込平均(前年比)が+6.7%と3月実績から加速しており、以前インフレ率は高水準にある。今週公表のCPIの内容が市場予想を上回れば7月会合での利上げ期待回復に繋がり、豪ドルをサポートしよう。0.68台回復も想定したい。一方、中国の景気後退懸念が意識される中、中国は祝日明けとなる。30日(金)には、中国6月製造業PMIが公表予定。前回実績は48.8と2か月連続で縮小し景気回復鈍化を意識させる内容となった。祝日明けの中国株市場が軟調に推移する場合や、豪5月CPIが前月同様に軟調な内容となれば経済的な結びつきの強い豪州経済にとってもネガティブに受け止められ豪ドルの重しとなりそう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/19~6/23)の値動き: (対ドル) 安値 0.6663 高値 0.6885 終値 0.6680
(対円) 安値 95.26 高値 97.68 終値 95.99



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。